

《本号の表紙絵》

1919年のワクシン広告

〔『中外医事新報』第九百四十二号 大正八年六月二十日発行 表紙 前二頁〕
(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1739349> より許可を得て転載)

現在の日本医史学雑誌は明治13年創刊の中外医事新報の後継誌とされている。日本医史学会が富士川游、藤波剛一らを中心として発足した昭和2年12月に中外医事新報1130号が日本医史学会機関紙と銘をうって発刊され、昭和16年1月の1287号から日本医史学雑誌と改題され現在が続いている。明治20年、広島から上京した富士川游は、ただちに中外医事新報社に入社して編集にあたったことがその後の医療ジャーナリストとして活躍の始まりとされる。中外医事新報の創刊は明治13年神田松下町で開業していた原田貞吉が創刊したドイツ系医学を背景とする医学総合誌として2000部を超える発行部数があったようである。本表紙絵の942号当時は富士川游を中心とする私立奨進医会が活動していた時代であり、編集人として小田平義、竹内薫兵、藤井秀旭、富士川游が名をつらねている。

2020年からのCOVID19パンデミックの中にある現在、1918年から1921年のインフルエンザ（流行性感冒）いわゆるスペイン風邪の世界的大流行が歴史として述べられることが多い。当時の世界人口が約17億人のなかでの死者5000万人、日本での人口5600万人の中で死者38万人を数えたとされている。本表紙絵は1919年の中外医事新報に広告として載せられているワクチンの1頁である。流行性感冒の病原体としてプアイフェル氏菌（インフルエンザ菌）、濾過性病原体または他の菌も挙げられていたようであるが、インフルエンザウイルスという表現は当時されていない。その効能は歴史的にもあまり明らではないもののワクチンが発売されていたことを知ることができる。現在の医学で考えればウイルス性肺炎に対する予防効果は考えられず、細菌の二次感染による肺炎の予防に死菌ワクチンの効果が少し考えられるかというところであろう。当時の日本における予防接種は日本ワクチン学会編『ワクチンの事典』によれば明治43年（1910）年1月種痘法施行（昭和23年予防接種法施行により廃止）、昭和23年（1948）6月予防接種法公布まで法的には空白となっている。予防接種法にはインフルエンザワクチンが含まれるが、これは1932年ヒトのインフルエンザウイルスが分離以後、1940年代に実用化された不活化ワクチンである。コロナウイルスに対するワクチンがひろくおこなわれている現在、その効果が世界でのパンデミックを終息させることを期待したい。

参考文献

- 1) 酒井シヅ. 日本医史学会の沿革. 医学図書館1972; 19 (3): 249-252.
- 2) 富士川英郎. 富士川游と雑誌. 日本医史学雑誌1990; 37 (1): 47-56.
- 3) 内務省衛生局編. 流行性感冒. 1922, 復刻版 東洋文庫778. 東京: 平凡社.
- 4) 日本ワクチン学会編. ワクチンの事典. 東京: 朝倉書店; 2004. p. 1-30.

(渡部 幹夫)